

寶卷から見る明代後期から清代初期の碧霞元君信仰

二一ノ宮 聰

はじめに

碧霞元君は、泰山の主神である東嶽大帝の娘と言われる神であり、子孫繁榮、病氣平癒、心願成就など人々の日常生活に寄り添った願いをかなえたとされる。なかでも子孫繁榮や求嗣に靈驗があるといわれ、子どもを望む女性を中心に篤く信仰され、現在でも華北を中心に盛んに信仰されている。碧霞元君の起源は、北宋の眞宗皇帝が泰山山頂に祀られる玉女像に「天仙玉女碧霞元君」の號を授けたことに始まると言われる。¹⁾その後、明代になると各地で盛んに信仰されるようになっていく。信仰さ

れた地域は、泰山一帯だけでなく、華北地域を中心に各地で見られ、特に北京では明代に信仰が傳播すると、最初は貴族の婦女を中心に受け入れられ家廟で祀られていたが、次第に民衆へと廣がり、清代後期から民國時期になると各地で廟會が開催され信仰活動の最盛期を迎える。一般に碧霞元君は目の病氣を癒やす眼光娘娘、子を望む者に子寶を授ける送子娘娘を左右に従え、三體一組で祀られる。また、同じく子授けの神である子孫娘娘や天然痘などの病氣を治す斑疹娘娘などを加え、五體一組、七體一組など、場所によって様々な組み合わせが見られる。例えば北京の人びとは親しみを込め九娘娘と呼び、

廟での信仰活動だけでなく、日常生活でのまじないにも登場するなど、人々の生活に深く結びついている神であった。⁽²⁾

こうした碧霞元君信仰に關する研究は、一九二五年に北京大學の顧頡剛を中心に實施された妙峯山碧霞元君廟會調査が一つの集大成と言える。妙峯山は北京の西北およそ五十キロに位置し、山頂に碧霞元君廟が座す。この廟會はかつて華北地域最大の碧霞元君廟會と稱されるほどであった。近年の碧霞元君に關する研究をみると、

北京を中心に各地の信仰狀況について盛んに研究されているが、大部分が顧頡剛の調査資料を用い、碧霞元君の由來や當時の廟會の様子を検討している。また、近年復興された廟會の調査報告なども見られる。顧頡剛資料のほか、碑文などを用いた研究もあるが、いずれの研究もほぼ顧頡剛の資料に基づいている。つまり、使用する資料の多くは清代後期から民國時期のものが中心であり、それを基礎に研究が進められてきた。

一方、明代中期から清代中期にかけての研究では、歴

史學などを中心に多くの成果をあげている。こうした研究は、碧霞元君の來歴や、碧霞元君廟の歴史など様々ある。他にも澤田瑞穂「泰山香稅考」では、明代の泰山は、すでに東嶽大帝よりも碧霞元君が信仰の中心となり、非常に多くの參詣者が山頂の碧霞祠を訪れていたことが述べられる。⁽³⁾しかし、こうした研究の多くは、泰山や周邊地域の様子、東嶽大帝や參拜者のことが中心に述べられており、碧霞元君そのものや、神格の變遷に着目した研究はあまり見られない。

よつて本文では、明代中期から清代初期にかけての碧霞元君の神格や職掌について、この時期に作成された碧霞元君に關連する寶卷を用い、そこに描かれる碧霞元君を手掛かりとして、碧霞元君信仰の初期の様相を探てみたい。

一、二つの碧霞元君經典

碧霞元君に關する最初の經典は『太上老君說天仙玉女碧霞元君護世弘濟妙經』（以下『弘濟妙經』）と『元始天

尊說碧霞元君護國庇民普濟保生妙經」（以下『保生妙經』である）とされる。この二つの經典はそれぞれ二千字程度と短く、しかも寶卷ではない。しかし、碧霞元君の名を冠した最も古い經典の一つであることに變わりはない。そこで、まずこの二つの經典の内容検討することで、初期の碧霞元君に對する認識を確認したい。

二つの經典は、前後二、三年の間に相次いで作成されたと考えられている。『弘濟妙經』はもともと、泰山山頂の碧霞靈應宮に奉じられた銅鐘の銘文である。一六四四年に山頂に靈應宮が敕建された際につくられた。銘文には御馬監等衙門太監張忠、全眞道士周玄貞など八名の名が刻まれる。一方の『保生妙經』は、『續道藏』に収録される。作者や詳しい成立年代は不明であるが、明洪武年間から萬曆四十二年（一六一四）の間に作られたと考えられている。⁽⁴⁾ まず二つの經典から明代後期の碧霞元君に對する認識をみていく。

次にあげる三つの資料は『弘濟妙經』の冒頭部分であり、連續した記載である。

寶卷から見る明代後期から清代初期の碧霞元君信仰

爾時太上老君於永壽二年三月初三日、在與王屋洞天、集諸天仙眾、大會說法。忽然東方祥雲瑞霞、異味馨香、仙音嘹亮、彩珣層幡、鶴駕羽輅、執扇晶簾、將臨法所。駐駕習雲、簾卷扇月忽、現一女仙。雲肩羽衣、錦繡霞裙、登雲珠履、百寶翠冠。從容迓步、徑詣道前、稟圭長跪、上白天尊言曰、臣者西天斗母精運元炁發現、金蓮化生吾身。歸隱岱嶽、修煉年久、意如初興、幸逢正果。功成道合、感蒙保奏。受敕天仙玉女碧霞護世弘濟真人。永鎮泰山、助國裕民、濟厄救險、賞功伐罪。自受敕命、不得有怠。按日巡察、巨山之圍、地獄之根。自計酆都、連絡血湖、冤魂受報、日夜無休。血湖罪苦、盡是女魂。飢吞火炭、渴飲熔銅、寒居冰室、熱處炎烽、百端異拷、有入無出。爲何因意。⁽⁵⁾

碧霞元君はもともと、斗母の氣を受け、金蓮が化生して生じた神であり、泰山での修行の後、天仙玉女碧霞護世弘濟真人に封じられた。そして泰山の神として、國や

民を助け、功績に報い罪に罰を與えた。さらに地獄の神として、死後の魂を管理する。こうした職掌は、碧霞元君固有のものではなく、東嶽大帝や泰山府君の影響が強いようである。また、ここで注目すべきは、斗母の氣を受け、太上老君から碧霞元君に民衆救済の敕命が下されていること、つまり高位の神仙と直接的な關わりを示すことで位の高さを際立たせ、他の神仙ではなく、碧霞元君が民衆を救済することの正當性を強調している點である。これに續き、太上老君が述べる。

老君告曰、岱嶽雖獄、乃是男女在世之時、忠孝仁義平等慈善誤犯之罪、命終而經不行拷掠卽判生化。酆都諸獄、皆爲負天達地、忤君逆親、邪行妄違、傾巢伐蟄、殺生害命、積諸惡咎、重若泰山、死經司獄、業緣報對。上有日限、倘興善功、計開由之。血湖等獄、皆因女人坐褥之時、血汚沖天、洗濯惡衣、穢汚江河、冒犯龍宮。務民取水、一備作供、褻瀆神祇、曬晾之際、有觸三光。因寒成竈、干犯炎君。積諸惡

咎、重若泰山、死歸地獄、萬劫受殃、永無出期。敕文符誥、永不經被。天仙再拜言曰、憫念憂苦願賜經⁽⁶⁾憐。

太上老君は、人々が死後に地獄に落とされ刑罰を受けることについて述べる。生前に「忠、孝、仁、義、平等、慈善」など人の行うべき道を違えても、死後に刑罰をうけることはなく、酆都地獄では、善功を積むことで、その過ちは帳消しとなる。だが、女性の生理現象や寒さのために竈に火を焚くなど、生活での當然の行爲が罪とされ、人々は地獄に落とされてしまう。これらの事に對して、碧霞元君は彼らを救済する慈悲を賜ることを願い出る。

老君告曰、授汝如意法要、如宜爲之。世間若有孝子順孫、慾追先祖、虔修善功、沐浴齋戒、恭請高行道士、或一或二、或三或五、於家就觀、嚴肅敬愼、看誦此經、或千或萬、諸苦俱脫。洗滌罪愆、青姑變善、

灰河化池、幽爽滯魄、承經托化。若人缺嗣繼世、虔誠求請、看念此經、便生福德智慧之男、捨慾爲女、便生端正有相之女。若爲壽爲災爲官爲訟爲妖、嚴肅敬慎、無不感應。臨險之時、心禱昧告、速爲護持。或有善男信女、印造散施、誠心供奉、如求如願、所告所以。不論高卑、一時同仁。凡懷善誠、比賜庇佑。⁽⁷⁾

太上老君は、碧霞元君に『弘濟妙經』を授けるにあたり、祖先を模範として眞摯に善行に努める者、家を繼ぐ者がおらず強く子供を願う者、何かしらの目的のためにみずからの行いを厳しく慎む者などは救済すべきであり、『弘濟妙經』を讀誦させ救済するよう傳える。これら民衆救済の職掌のなかでも嗣子を授けるといった「子授け」は、現在の碧霞元君信仰の中心的職掌であるが、ここでは數ある救済行爲の一つに過ぎない。また、これらの民衆救済行爲は、碧霞元君に限らず、多くの神々がおこなうありふれた行爲でもある。

では次に『保生妙經』を見てみよう。これも『弘濟妙

經』と同様に、碧霞元君が人々を救済することが述べられる。

爾時、元始天尊駕幸始青上境、碧玉瓊臺陞自然百寶法座、爲諸侍眞說一元妙化至玄上道。是時、天尊光暎萬天、仙樂自鳴。天花徧滿、異香飛揚。諸天諸帝、三界群眞、雲集臺下。作禮既畢、環拱座前、咸聽說法。時有五嶽獻花、四瀆貢寶。班集中有一眞人、名曰鬱羅、出班端跪、上白天尊曰、臣昔宿何緣、得侍玉陛。幸聞至道、深荷恩慈。治化所司、愚懷未悟。切以下界生民、生生化化、各有神司、判注天人、悉由東嶽碧霞元君、亦主泰山、證位緣何、願聞道因。⁽⁸⁾

しかし、碧霞元君が民衆を救済する理由について、鬱羅眞人があまたの神仙の中から進み出て、なぜ碧霞元君がその地位にあるか、その因縁を尋ねる。

天尊曰、善哉斯問。汝復其位、吾爲宣說。天地既判、

五嶽莫方、萬物生春、萬化始東、東嶽注生、變理元工。上古生人、稟性貞良、克全忠孝、生而多壽、死而徑生、元無愆釁、無復幽冥、不失本真、往生善道。末世人民、行違古道、心生巧術。不忠君王、不孝父母、不敬師長、不友兄弟。恃強凌弱、妄行爭奪。殺盜姦淫、褻瀆三光、不懼神明。及有婦女、罔知宿世因緣。今受如是身命、不自悔悟、妄起貪嗔。慾富憎貧、怨天恨地。侮慢公姑、欺辱妯娌。忍爲不仁、作踐兒女。淫祀邪神、暗行咒詛。爲惡種種、報對無停。是時元君已證太一青玄之位、觀見眾生受此沉淪、悲慈不已。爲化女流、普度群生。於四月十八日、分眞化炁、現是慈顏。陟降泰山、靜居上境、復鍊元眞、功周億劫。慈光洞照、徧徹幽微。應九炁以生、體一元而化。神功莫測、浩德難量。惠溥天民、傾土皈依受命玉帝、證位天仙、統攝嶽府神兵、照察人間善惡罪福、照報感應速彰。

現在の世の中は、人々は道を違え、争いや不仁が横行

している。そこで碧霞元君は、この亂れた世の中で苦しむ人々を哀れむ慈悲の心が人一倍強く、みずから進み出て下界に降ったのである。そして、ここでも元始天尊の言葉や玉帝から命を授かることで、碧霞元君の行爲の正當性や神格の高さが強調されている。

また、一つ注目したい点として、資料の最後に碧霞元君が嶽府の神兵を統率し、人間の善惡罪福を照察すると述べられている。これは本來、冥界神である東嶽大帝（泰山府君）の職掌であるが、碧霞元君が代わりを擔っている。これは碧霞元君の救済行爲の正統性を示すことよりも、泰山神としての職責を碧霞元君に負わせることで、泰山を代表する神は碧霞元君であり、東嶽大帝よりも高位にあることを意識させているのではないだろうか。明代後期になると碧霞元君に對する信仰は泰山一帯など特定の地域では非常に流行し東嶽大帝を凌ぐほどになっていた。しかし、こうした地域は限られており、やはり泰山神に對する民衆の認識は、東嶽大帝を頂點とする考えが一般的であり、碧霞元君は東嶽配下の一神に過ぎな

かった。そこで東嶽大帝の職掌を碧霞元君に移すことで、碧霞元君が泰山を代表する神となり、泰山神として民衆救済を行うことの正當性を強調し、人々に名前を廣く知らしめたのではないだろうか。こうした行爲は、信者が喧傳の役割を擔うこともあるだろうし、民間の教團が碧霞元君の名前を利用し布教に利用したことも信仰の擴大に一役買っていたと思われるが、この問題については次稿に期したい。

二、寶卷にみられる碧霞元君

碧霞元君に關連する寶卷は、『靈應泰山娘娘寶卷』（萬曆年間）、『天仙聖母泰山源流寶卷』（嘉靖年間）、『泰山天仙聖母靈應寶卷』（康熙年間以前）、『泰山苦海寶卷』（清初）があり、いずれも明代後半から清代初期にかけてつくられた。⁽¹⁰⁾ これらは大乗教など民間教團の經典の一つであるため、寶卷名は碧霞元君の名を冠しているものの、内容を見ると無生老母や太上老君を最高神として、その下で碧霞元君が人々を救済している。⁽¹¹⁾ 例えば『天仙聖母

泰山源流寶卷』と『靈應泰山娘娘寶卷』は西大乘教で重視された經典の一つであり、教派系寶卷とされる。⁽¹²⁾ また、『靈應泰山娘娘寶卷』は、張員外の妻の董氏が私財を投じて作成し、民間への流布が最も多い碧霞元君寶卷でもある。

これら碧霞元君寶卷の構成は、基本的にはどれも同じで次の通りである。天上世界にいる碧霞元君は、下界の人々が種種の困難や苦難に苦しむ姿を哀れに思い、みずから願い出て下界に降る。人界に下りた碧霞元君は、各地を巡り困難に直面している人々に救いの手を差し伸べ、最終的にすべての人々を救済して、再び天上世界へと戻ってくる。寶卷によって、碧霞元君が人々を救済するもの、人間の娘が修行により天界にのぼり碧霞元君となるまでの過程に重きを置くものなど重點を置く部分は異なる。⁽¹³⁾

また、寶卷という特性からしても、ここに描かれる碧霞元君は教團の教理に基づいた脚色が加えられているが、少なからず當時の民間での信仰狀況が反映されていると

考えられる。よって、ここではこれら寶卷に描かれる碧霞元君について見ていくことで、當時の民間での信仰の様子について考察してみたい。次の資料は『靈應泰山娘娘寶卷』第一品冒頭に述べられる碧霞元君の出自に關する記述である。

夫泰山娘娘者、天仙聖母、碧霞元君、鎮守泰山、感動天下、善男信女進香、不知當初起根立地。原是西牛賀洲昇仙庄、金員外母黃氏、娘娘聖體授胎、三歲吃齋、七歲悟徹心明、聰明智慧、智廣才高、萬法皆通、感天子取坐昭陽、娘娘願不戀皇宮、被父母趕出昇仙庄、信步遊行、來到東土泰山、隱姓埋名、苦修三十二載、亦得明心見性神通廣大、指山崩、指水水冽、呼風風至、喚雨雨來、降妖滅怪、無所不通、慈悲故、慈悲故、大慈悲故、信禮常住三寶。⁽¹⁴⁾

『靈應泰山娘娘寶卷』では、金員外の娘が泰山での修行を経て昇仙して碧霞元君となった。民間の娘が修行の

末に昇仙を果たし碧霞元君になるという故事は、碧霞元君傳承で最もよく見られる故事のひとつである。これ以外にも碧霞元君の出自に關する傳承は様々あり、未だに定説はない。例えば顧炎武は『山東考古錄』において出自故事を四種類に整理する。一、東嶽大帝の娘。泰山山頂の玉女池に祀られる玉女像が後に碧霞元君に封じられた。二、華山の玉女が泰山へやってきて碧霞元君となった。三、黃帝が泰山に遣わした七人の仙女の一人が碧霞元君となった。四、民間の娘が修行を経て昇仙して碧霞元君となった。この民間の娘が誰なのかについても多くの故事がある。⁽¹⁵⁾上に引いた『靈應泰山娘娘寶卷』では金員外の娘であるが、『天仙聖母泰山源流寶卷』では、安國の公主である千花とされる。内容は、觀音老母を話の中心に据え進められる。觀音老母は苦しむ人々を救済するために、長安國の公主である千花に轉生し人間界に赴く。千花は世の中には困難に苦しむ多くの人々がいることを知り、公主の立場を捨て人々を救済することを決意し修行の旅に出る。そして十二年におよぶ修行の中で困

難に直面する多くの人々を救済し、ついに人々の救済を終え昇仙を果たす。昇仙後、再び天宮に戻った觀音老母は泰山を掌り、天仙聖母娘娘（碧霞元君）に封じられる。その様子は次のように述べられる。

觀音老母、送佛回來、又辭玉帝。金枝佛、便說、明王、你虔誠久壘、苦行修行、感動古佛、都到我天宮、慶赴龍華三會、賜與你執扇掌扇、錦繡龍袍、寶翠珠冠、蓮花寶座、封你泰山掌管、爲天仙聖母娘娘、我今同王母送你到泰山。¹⁶

こうした故事の内容は、顧炎武が紹介する出自故事そのものである。また、天上世界の神が人間に生まれ變わり、人間世界で多くの人々を救済するという故事は、碧霞元君傳説に限らず、他の救済譚にも見られる。¹⁷ 天上世界から手を差し伸べるのではなく、人間の世界にみずから下り、俗塵にまみれながら人々と共に苦難を分かち合い克服していく姿を見て、人々は神に對してより親しみ

を感じたのかもしれない。

こうしてみると、明代後期から清代初期にかけての華北地域、特に北京一帯では民間の娘に由來する碧霞元君故事が廣く傳播していたであろうことが推察される。そして西大乘教では、これら民間に廣く流布する傳承を寶卷に取り入れたのであろう。しかし、こうした故事の基本構成は定まっているが、派生した内容もまた多くみられた。さらに、寶卷にみられる碧霞元君の呼稱は「泰山娘娘」や「天仙聖母碧霞元君」だけでなく、「頂上娘娘」や「聖娘娘」など様々ある。こうした呼稱は現在でも見られる。複数の呼稱は、名稱や神格がすっかり固定化される前に各地に信仰が傳播したため地域により異同が見られるというよりも、人々の生活に深く受け入れられ、より身近に感じ親しみを込めた名前と呼ばれたがゆえに様々な呼び名が生まれたのかもしれない。そして信仰が受け入れられる過程で地域の信仰を少しずつ吸収していった結果、各地域で神格や職掌に細かな違いが生まれたのではないだろうか。

では次に、碧霞元君の職掌をみていきたい。次の資料は、『靈應泰山娘娘寶卷』第一品冒頭部分で、碧霞元君の役割を紹介している。

轄天齊 管十王 綜管陰間
按七十 管五司 一十八獄
管天下 府州縣 善女善男
封王靈 巡山的 都管元帥⁽¹⁸⁾

「天齊を轄り」、「十王を管り」、「陰間を總管する」とある。ここの「天齊」とは東嶽天齊帝、つまり東嶽大帝であると思われる。つまり、碧霞元君は泰山の主神である東嶽大帝さえも配下に置き、さらに十王といった冥界神までも従え、泰山に關するあらゆる神を管轄している。

だが本来、この役割は泰山の主神たる東嶽大帝（泰山府君）の役割であり、冥界神としての東嶽大帝が泰山地獄を管轄するはずである。このような立場の入れ替わりは、碧霞元君に對する信仰が盛んとなり、ついには東嶽大帝

をも凌ぐ狀況が起こつていたことの表れでもあろう。實際、明代後期には、碧霞元君參拜のために泰山に登る香客から徴收する香稅（入山稅）が縣の一年間の稅收をうわまわること⁽¹⁹⁾もあった。また、馮夢龍『醒世因緣傳』第六十八、六十九回は、村の女達が集團で泰山の碧霞元君祠まで參拜に向かう道中のどたばたを題材にした話で、參詣者でこつた返し熱氣のある泰山や碧霞元君祠の様子が描かれる。こうした點からも、泰山一帯での碧霞元君信仰の隆盛ぶりが知られる。こうした碧霞元君の職掌や位の高さは、何度も繰り返される。

古佛又說、東嶽天齊領着諸神你去泰山、提調七十二司、總管閭浮廟宇、城隍神祇、十王朝參、各司獄主、大小鬼王、都聽使領。⁽²⁰⁾

この古佛は碧霞元君である。碧霞元君が東嶽大帝に命じて冥界の神々を主管させている。こうしたイメージの強調が繰り返されることは、北京や泰山一帯では碧霞元

君は盛んに信仰されていたものの、やはり當時の一般的認識では、泰山の神といえは東嶽大帝であり、碧霞元君は東嶽大帝配下の一人の神に過ぎないという認識を脱し切れていない、または、碧霞元君という名前は知っているものの、具體的神格や職掌までは知られていなかったのではなからうか。そのため、碧霞元君が高位の神仙であることを示すために、碧霞元君が東嶽大帝に命を下すという記述をあえて繰り返し、人々に新たなイメージを刷り込んだのではなからうか。

また、先に見た民間の娘が昇仙したという傳承もあるように、碧霞元君はもともと民衆の信仰活動の中から誕生した神であり、時代によっては王朝の支援を受けることはあつても、やはり民間の淫祠雜祀の神であつた。⁽²¹⁾つまり民間での信仰が盛んではあつても神格は低かつた。そのため、太上老君や元始天尊から命を下され、東嶽大帝をはじめ多くの神々を従える描寫を繰り返すことで神格の高さが強調された。民衆は高位の神に祈りを捧げることで、より一層の御利益を願つたのではなからうか。

ここまで、碧霞元君の由來や神格について見てきて、多くが東嶽大帝の職掌をそのまま引き繼いでいることを確認してきた。では、明代後期から清代初期には碧霞元君固有の職掌は未だ確立していなかったのだろうか。一般に、清代後期以降に見られる碧霞元君信仰では、心願成就、病氣平癒、子孫繁榮が主な職掌であり、現在も同様である。特にかつての長子相續を根幹としていた相續制度や二〇一四年まで續いた一人っ子政策下にあつて、家を繼ぐ男兒の誕生は人々が最も強く望む願いの一つでもあつた。そのため碧霞元君を語る上で子孫繁榮の職掌は切り離すことができず、寶卷でも求子や送子の描寫はしっかり描かれる。

話說聖母娘娘罩下普天星斗、一切神王、東嶽天齊十帝閻羅、七十五司、大小鬼判、各上朝排站立、當直神上奏、聖母娘娘、天下男女、多有不全、有財缺子、有子無財、有幾家高門高戶、無子求子、聖母殿前、發願許施、金花銀花、金娃娃銀娃娃、綉幡掛跑、要

求子嗣、准也不准、聖母聽我、我不用財寶、我只替天行道、如有富家求子、准送貴子賢孫、改換門庭、亦不虛說、也是實麼。⁽²²⁾

寶卷では、碧霞元君の神格を高める記述が多く見られることは前述してきた通りである。一方、寶卷の後半部分に着目すると、人々を救済する描寫が増えてくる。碧霞

元君を頼り救いを求める者には、貴賤富貴を問わず等しく願いに應じる。特に『靈應泰山娘娘寶卷』は、張員外の妻の董氏が私財を投じて嗣子を求めるために作成されたこともあり、求子の描寫は多い。⁽²³⁾ また『泰山聖母苦海寶卷』には求子だけでなく、無病息災や病氣平癒といった碧霞元君の多くの職掌が書かれる。

個個要宣苦海卷	聖母慈悲保安	爲國進忠宣寶卷	民安國泰眞平安
爲父要宣苦海卷	父母安樂福壽全	爲兒要宣苦海卷	兒女雙全得團圓
爲名要宣苦海卷	連登凡科萬古傳	(中略)	
爲病要宣苦海卷	災消病退無有難	(中略)	
爲目要宣苦海卷	眼光明亮觀三山	啞叭要宣苦海卷	我佛普照他會言
兄弟要宣苦海卷	九世同居得周全	平安要宣苦海卷	天賜福祿保平安
壽數要宣苦海卷	福壽齊增得長遠	貧窮要宣苦海卷	增幅延壽得高遷
修行要宣苦海卷	長生不老萬萬年 ⁽²⁴⁾		

これは寶卷を念ずれば得られる功德であるが、その内容是一家安全、健康長壽、無病息災といった日常生活で

のありふれた願いであり、さらに目の病氣を治す、子供を授けるといったことも書かれる。つまりこれらの願いは、いずれも碧霞元君の職掌であり、碧霞元君信仰の中心的願いでもある。また、當時は病氣にかかれれば命を落とす可能性は現在よりもずっと高く、醫療技術も不十分であった。そのため求子だけでなく、病氣平癒や病氣豫

防も人々にとって身近な願いであった。このように民衆の日常生活に見られる多くの願いが碧霞元君に附加されるなかで、次第に現在の職掌が定まっていたのである。次の資料も『泰山聖母苦海寶卷』の一節であるが、ここでは碧霞元君の職掌がそのまま記される。

聖母感動普天下

男女思想聖母面

有難禱告金身現

萬事亨通保平安

冤枉要求天仙母

巡還報與聖母前

修行拜求泰山母

靈光普照不黑暗

(中略)

貧窮要求天仙母

天賜黃金得高遷

缺少兒女求聖母

忙差子孫送兒男

(中略)

凶險要求天仙母

逢凶化吉得安然

產難要求泰山母

老母保護無災難⁽²⁵⁾

ここまで寶卷に描かれる碧霞元君について検討してきた。當然の事ながら、これらは寶卷に描かれる内容であるため、一定の脚色や恣意的表現が加えられているという点を考慮する必要がある。だが、當時の民間での信仰

状況を一定程度反映していることも確かである。この頃の碧霞元君の職掌は、現在のように固定されたものではなく、人々のあらゆる苦難を救済する、民衆生活に寄り添った神であったのではなからうか。

こうした民衆の日常生活でありふれた願いをかなえるからこそ、碧霞元君は人々に廣く受け入れられ、盛んに信仰されていた。民衆にとって國家の守護や戰亂の加護といった大きな願いよりも、目の前の一日一日を大過なく無事に過ごすことが何より重要であつた。そのため日常生活のありふれた願いを叶える碧霞元君が廣く受け入れられていたのであろう。

三、北京の碧霞元君廟と祀神

ここまで碧霞元君の神格や職掌について見てきた。明

代後期以降、盛んに信仰されるようになった碧霞元君であるが、實際の廟ではどのように祀られていたのか。ここでは特に信仰活動が盛んであつた北京の廟を例に見ていきたい。

現在の碧霞元君は、眼光娘娘と送子娘娘を左右に従え、三體一組を基本として廟に祀られる。廟によつてはさらに娘娘神を加え五體一組、七體一組、九體一組など様々な組合わせが見られる。こうした複数の娘娘神の組み合わせは寶卷でもすでに見られる。

南無泰山娘娘摩訶薩

南無眼光娘娘摩訶薩

南無子孫娘娘摩訶薩

南無送子娘娘摩訶薩

南無注生娘娘摩訶薩

南無催生娘娘摩訶薩

南無癍疹娘娘摩訶薩

南無王母娘娘摩訶薩

南無救苦救難靈感觀世音菩薩

南無盡虛空遍法界過現未來佛三寶⁽²⁶⁾

ここでは泰山娘娘（碧霞元君）を筆頭に、眼光娘娘、子孫娘娘、送子娘娘、注生娘娘、催生娘娘、癍疹娘娘の

計七體の娘娘神の名前が挙げられる。これら娘娘神は各々が固有の職掌を有する。また、王母娘娘は西王母で

ある。ここまで碧霞元君は單獨で様々な職掌を有する萬能神のように述べてきた。しかし、實際には信仰の早い段階で碧霞元君を支える娘娘神達が登場していた事がわかる。現在の廟宇での祭祀状況をみても、碧霞元君の隣には複数の娘娘神が配置される。これら陪神の娘娘神は個別の名稱を有するものの、信仰内容としては陪神も含めて碧霞元君信仰であり、陪神が主神として廟宇で單獨に祭祀されることは、筆者の知る限り見たことはない。

先に見てきたように、時代と共に人々の信仰内容が多様化していくにつれ、碧霞元君一人で全ての願いを叶える萬能神であるよりも、人々の願いをより廣く受け止めるために明確な職掌を有する個別の娘娘神が陪神として登場してきたのではなからうか。

次の一文は『靈應泰山娘娘寶卷』の一節である。先に述べたように『靈應泰山娘娘寶卷』は董夫妻が個人的に發願して作成した寶卷と言われている。その内容は、董夫妻には長い間子供がいなかったため、家内に祭壇を設け、頂上娘娘（碧霞元君）、眼光娘娘、送生娘娘の三體

を祀り嗣子を願う。

話說娘娘、設立道場善度大地男女且丕表、再說京都有一老長者、董氏夫人、夫婦二人累劫脩福、不能脩慧、有德無子、長者前思後想爲人在世、絕其後代樹倒無陰。夫人聽說、暗流痛泪、高叫夫主、多放宽心、只說頂上娘娘、有靈有聖、發心鑄造聖母、宅中恭敬問母求子、可不是好、長者聽說、件件依從、就造頂上娘娘、眼光娘娘、送生娘娘、供在宅中、永不退心燒香禮拜、要求後代、時刻香火不斷、信受頂禮、時不放、常常如是、再無一刻懈怠、也是實麼。

假に子供を望むのであれば、碧霞元君または子授けを掌る送生娘娘だけを家庭内に祀ればよいはずだが、目の病氣を治療する眼光娘娘を含めた三體で祀られていることから、人々の信仰のなかでは複数體で祀ることが一般的であったのであろう。董夫妻の場合、家庭内に祭壇を設けたために多くの神像を置くことはできず三體なの

かもしれない。また、北京の東嶽廟娘娘殿ではかつて九娘娘と呼ばれる九體の娘娘神が祀られていた。⁽²⁸⁾現在の東嶽廟には娘娘殿は存在せず實際に確認することはできないが、同じ北京の有名な碧霞元君廟である妙峯山碧霞元君廟には五體、丫髻山にも五體の娘娘が現在も祀られて

いる。他の碧霞元君廟も様々な組み合わせで祀られていることは容易に想像ができる。例えば『靈應泰山娘娘寶卷』には、當時の北京で著名であつた碧霞元君廟が記されている。

三頭營 惟東頂 娘娘鎮就
在涿州 修廟堂 普度男女
白草窪 新修盖 行宮殿宇⁽²⁹⁾

丫髻山 惟北頂 普度眾生
馬駒橋 正正的 鎮住北京

ここに見られる碧霞元君廟の中でも東頂と北頂、さらに馬駒橋（南頂）は特に名が知られており、さらに西頂と中頂とを合わせて五頂と呼ばれた。東頂と南頂は清代後期には廟宇が荒廢してしまい、管見の限り資料からも當時祭祀されていた娘娘神を確認することはできない。

しており、清代中期までは北京で最大規模の碧霞元君廟會が開催され、康熙皇帝からは扁額が下賜され、毎年の廟會期間になると宮中から慶賀の特使が派遣されるほど著名な碧霞元君廟である。⁽³⁰⁾現在の丫髻山には五體の娘娘神が祀られる。

しかし、北頂は二〇〇八年の北京オリンピックに合わせ殿宇が再建され、現在は碧霞元君、眼光娘娘、子孫娘娘の三體が祀られる。また、丫髻山は北京の東郊に位置し

おわりに

以上、明代中期から清代初期に作成された寶卷に描か

れる碧霞元君について見てきた。この時期の碧霞元君は民衆の強い支持を受け信仰が隆盛を迎えつつあるものの、多くの人々の認識は、いまだに泰山諸神の一人に過ぎず、東嶽大帝や泰山地獄を管轄する神という印象とは切り離されずにいた。そのため寶卷では、東嶽大帝より神格が上であることを意識させ、元始天尊や太上老君、さらに無生老母といった最高神から直接、泰山の神に封じられることで威光を高め、泰山の神として人間を見守り、苦難にあえぐ人々を救済することに正當性を持たせたのである。

清代以降、次第にこうした印象から脱却していき、眼光娘や子孫娘を伴い、子孫繁榮や病氣平癒をかなえるという現在の碧霞元君の神格イメージが形成され固定されていったのであった。

註

- (1) 馬端臨『文獻通考』卷九十郊社二三。一〇〇八年に眞宗皇帝が泰山で封禪をおこなった際、山頂附近の玉女池で玉女像を發見し、後に池の傍らに祀った。その後、こ

れが碧霞元君となったという傳承。同様の話は王之綱『玉女傳』や王圻『稗史彙編』などにも見られる。

- (2) 民衆の日常生活に見られる碧霞元君信仰については H. Y. Lowe, "The Adventures of Wu: The Life Cycle of a Peking Man" Vol. 1, 2 (Peking, The Peking, Chronicle Press, 1940 and 1941) に紹介されている。本書は一九八八年に藤井省三、宮尾正樹、坂井洋史、佐藤豐の共譯で平凡社から『北京風俗大全』として出版されている。本文は平凡社版によった。

- (3) 澤田瑞穂「泰山香税考」、澤田瑞穂『中國の民間信仰』、工作舎、一九八二年、一九八二一六頁。

- (4) 范恩君「『碧霞元君護世弘濟妙經』考辨」、『宗教學研究』、四川大學、二〇〇六年第一期。および任繼愈主編『道藏提要』、中國社會科學出版社、一九九一年、一一四四—一一四五頁。

- (5) 『元始天尊說碧霞元君護國庇民普濟保生妙經』、太上老君說天仙玉女碧霞元君護世弘濟妙經、藏外道經寫本選輯、山東沂蒙書院、二〇一四年。

- (6) 同前注。

- (7) 同前注。

- (8) 『元始天尊說碧霞元君護國庇民普濟保生妙經』は『續道藏』隸五に收録される。ここでは『元始天尊說碧霞元君護國庇民普濟保生妙經』、太上老君說天仙玉女碧霞元君

護世弘濟妙經』(藏外道經寫本選輯、山東沂蒙書院、二〇一四年)によった。

(9) 同前注。

(10) 碧霞元君關連寶卷に關して、車錫倫氏が成立年代や内容構成について考察している。「明代西大乘教的『靈應泰山娘娘寶卷』」、「揚州師範學院報(社會科學版)」、一九九三年第四期。「新發現的清初南無教『泰山聖母苦海寶卷』」、「河南教育學院學報(哲學社會科學版)」、第二八卷、二〇〇九年第一期。「泰山天仙聖母靈應寶卷漫錄」、「民間文化論壇」、二〇一六年第一期。

(11) 黃育榎原著、澤田瑞穗著『校注破邪詳辯』(道教刊行會、一九七二年)に「靈應泰山娘娘寶卷」の項があり、「今反謂習邪教者、必敬奉碧霞元君、始能見無生老母。是謬以無生之位、反在碧霞之上也。」とあり、無生老母が碧霞元君の上位に置かれていることに言及されている。

(12) 磯部彰「明代教派寶卷の文學故事と清代の故事系寶卷との關係」、王定勇主編『中國寶卷國際檢討會論文集』、廣陵書社、二〇一六年、一八六—一九七頁。

(13) 車錫倫氏は『中國寶卷研究』(廣西師範大學出版社、二〇〇九年)において、「東嶽泰山女神—泰山老奶奶」という項を設け(四三三—四四九頁)、碧霞元君が民衆の信仰を集めるようになる過程を考察している。

(14) 『靈應泰山娘娘寶卷』、張希舜等主編『寶卷初集』十三

卷、山西人民出版社、一九九四年。

(15) ほかにも容庚は「碧霞元君廟考」(顧頡剛編著『妙峯山』、國立中山大學語言歷史研究書、一九二八年)において、顧炎武の説を引きつつ、碧霞元君出自故事の検討をしている。

(16) 『天仙聖母泰山源流寶卷』卷一、馬西沙主編『中華珍本寶卷第一輯』第八冊、社會科學文獻出版社、二〇一二年。

(17) 澤田瑞穗『修訂地獄變』(平川出版社、一九九一年)には、「地藏と目連」という項が設けられ、佛教の故事を中心に地藏菩薩や釋尊、觀音などが地獄に示現して、苦しむ人々を救済する話が紹介されている。寶卷では人間世界、佛教故事では地獄が舞臺となっているが、どちらも神佛が人々を直接救済するという基本構造は同じである。

(18) 前掲『靈應泰山娘娘寶卷』第一品。

(19) 前掲、澤田瑞穗「泰山香稅考」。

(20) 前掲『天仙聖母泰山源流寶卷』卷五。

(21) たとえば一九二八年に南京國民政府は正祀と淫祀を定めた「神祇存廢標準」を發布した。この中で民間に流行して打破されるべき迷信の神々を淫祀と分類し、碧霞元君はここに分類された。

(22) 前掲『靈應泰山娘娘寶卷』第八品。

Bixia Yuanjun (碧霞元君) Worship from the Late Ming Dynasty to the Early Qing Dynasty as Seen from the Baojuan (寶卷)

NINOMIYA Satoshi

In this paper, I would like to examine the state of the early faith of Bixia Yuanjun (碧霞元君) by examining who is depicted in the Baojuan (寶卷). Bixia Yuanjun was created from the late Ming dynasty to the early Qing dynasty. In previous studies materials from the mid-Qing dynasty onward, in which the religious situation was almost fixed, were mainly used. On the other hand, in the era before that it was not mentioned much in the conventional research due to the lack of materials. Therefore, in this paper I will focus on the Baojuan related to Bixia Yuanjun, who was disseminated to the private sector. Some of the Baojuans were created as a scripture of the private cult, but they all strongly reflect the religious situation of the people at that time. Therefore, using these scriptures as clues I would like to examine the transition process of the Taishan belief from Emperor Higashidake to Bixia Yuanjun, and the state of the people's belief in Bixia Yuanjun from the late Ming dynasty to the early Qing dynasty.